

(研究報告) 抄録用紙

演題名 (全角 80 字以内)	Mechanically Assisted Coughing (MAC) は筋萎縮性側索硬化症 (ALS) の生命予後を延長するか？
演者名	藤田 拓司、伊藤英樹、波江野茂彦
所属	(医) 拓海会神経内科クリニック

研究方法 (右から番号を選び NO. 欄に番号をご記入ください)	1. 症例報告 2. 症例シリーズ報告 3. コホート研究 4. 症例対照研究 5. 調査研究 6. 介入研究 7. 二次研究 8. 質的研究 9. その他研究	NO.
		3
<p>【目的】呼吸筋障害により咳嗽が弱くなる ALS などの疾患では排痰補助装置導入が推奨されている。平成 22 年度診療報酬改定で人工呼吸管理を行っている在宅患者を対象に診療報酬が設定されたこともあり当院では本格的に導入した。その経験から排痰補助装置を使うことで「気道感染症の頻度が減少した」「これまで治らないと思っていた肺炎が治るようになった」との印象を持っていた。MAC の効果を示した先行研究が少ないこともあり、この印象が正しいものであるかを検証している。</p> <p>【方法】対象は当院で診療を担当した ALS 患者のうち NPPV、TPPV を導入したケース。NPPV 導入し、TPPV 導入しなかった群を A 群、NPPV 導入後に TPPV へ変更した群を B 群、NPPV 導入せずに TPPV 導入した群を C 群としている。カルテよりデータを抽出した後ろ向きコホート研究。</p> <p>【結果】対象は 82 人(A 群 49 人、B 群 18 人、C 群 15 人)。排痰補助装置の使用は(使用群)A 群 13 人、B 群 16 人、C 群 7 人。A 群の NPPV 期間は使用群で 18.5 ヶ月、未使用群で 16.0 ヶ月であり、有意差はなかった。B+C 群での TPPV 期間は使用群で 121.9 ヶ月、未使用群で 55.5 ヶ月であり、使用群の方が有意に長かった。</p> <p>42 人に気道感染症を認め、その頻度は NPPV 期間 46 回/670 カ月(うち入院が必要であったものの 12 回)、TPPV 期間 62 回/1605 カ月(同 8 回)であった。排痰補助装置使用時期の方が気道感染症の頻度は高かった。入院が必要な気道感染症の頻度は低かった。</p> <p>直接の死亡原因が気道感染症であったものは A 群で 6 人(使用群 2 人、未使用群 4 人)、B、C 群ではなかった。</p> <p>【考察】①MAC 使用は ALS 患者の TPPV 期間を有意に延長するが、NPPV 期間は延長しない。 ②MAC 使用は、気道感染症の頻度は減じないが、重症化を予防している可能性がある。 (利益相反なし)</p>		